志摩漁村の「同輩集団」の基本的性格

——三重県鳥羽市I町の「茶飲み友達」を通して——

足　高　壱　夫

I．問題の所在

本稿の目的は、第一に三重県鳥羽市I町の人たちによって「茶飲み友達」と呼ばれている〝インフォーマル〟で〝非定型的[1]〟なグループの活動を記述することにある。第二に西南日本の村落社会構造の特質についても言及したいと考えている[2]。

この「茶飲み友達」は、「ホーバイ[3]の集まり」とI町では言われている。西南日本の村落においては一般に、ホーバイ（朋輩）は「友達」の民俗概念であり、またこのようなホーバイの集団を民俗学者の竹田旦（1989）は「同輩集団」と概念規定している[4]。

西南日本の村落生活における「同輩集団」の存在および活動の意義については、一定程度の研究蓄積がある。しかし「同輩集団」の研究は、主として青年段階の若者組と婚姻習俗に焦点があてられ、婚姻後の生活における「同輩集団」への言及はその付き合いの継続を指摘するにとどまっている。また、その具体的な構成に立ち入った研究もみられないのが現状である。

村落社会内の社会関係のあり方を整理する仕方はさまざまあるだろうが、例えば竹内利美（1967）は、「定型的集団」と「定型的集団をなさない」ものという整理をおこなっている。「定型的集団」とは、「『家』の属性にしたがって、（中略）一定の規制のもとにむすび合う（中略）恒常的な連帯関係」であり、具体的には同族団・村組・近隣組（例えば、「向う三軒両隣」）・年齢集団といったものである。一方、「定型的集団をなさない」ものは、「分化した特定の機能に即して、選択的・個別的に他の『家』とむすび合」い「『家』ごとに異なる圏を描き、またその関係も流動的」なもので、具体的には親類仲間・トナリ関係等である[5]。

そして竹内（1963,1967）は、これらの集団ないしは関係を成立させるものとして3つの契機をあげている。それらの契機でできた集団ないしは関係を下記のように分類し、近代日本村落の「内的体系」の基本要素としている。

1）「親族＝血縁の関係」によって結びついている集団ないしは関係

①「『家』創設の由縁による系譜的関係にもとづく同族的家連合（同族団）」

1）この言葉は、後述する竹内利美の「定型的集団をなさない」ものという意味で筆者が本稿で使用。

2）本稿は1985年以来、断続的に行なっている調査による。

3）I町の人々によれば、「ホーバイ」という言葉は「友達」といった意味で使っていると教えてくれる。他に「アイボウ」という言い方も同様に使われる。人によって「ホーバイ」という言葉を好んで使ったり、また「アイボウ」という言葉を使ったりしているが、意味はまったく同じであるということである。
しかしなかには「友達＝ホーバイ（アイボウ）ではない」という人もいる。「友達の中の友達＝ホーバイ（アイボウ）」であって、友達としか紹介できない人もいれば、また同級生としか紹介できない人もいるという（後述の事例IのM）。

4）竹田（1989）は、年齢や世代を契機にして形成されている集団を次のように整理している。子供組・若者組・中老組・年寄組といった村落自治と結びついた定型的な組織を「年齢集団」と呼び、これと区別して数人から十数人の小人数からなる不定型なものを「年齢小集団」としている。そしてさらに、「年齢小集団」を同年齢の集まりか二〜三歳の年齢差をともなった集まりかで「同齢集団」と「同輩集団」と概念的区別をしている。

5）「定型的集団」と「定型的集団をなさない」ものとの村落社会での機能的関係は次のように理解されている。「個別的・選択的であるインフォーマルな近隣的関係は、むしろ、それに依拠して派生するか、あるいはフォーマルな近隣的諸関係の間隙を埋める脇役的存在にすぎなかったといってよいようである（竹内 1967；132）。」

②「単なる親縁関係による親族的家連合関係（親類仲間）」

2）「居住＝地縁の関係」によって結びついている集団ないしは関係（「一定の規則によって、いくつかの家群にほぼ平準的に分割されて構成されている、いわゆる（狭義の）近隣集団ないしは近隣関係」）

①「地域原則」の村組

②「家並原則」

a．近隣組

「一定の『家数』を基準に二者択一的な帰属関係において家々が明確な集団に編制されている型」

b．トナリ関係[6]

「家々がそれぞれの『家並』に即して異なる交渉圏を連鎖的に持つため、全般的には定型的な集団形態を示さない型」

3）「性序（世代）別による集団体系、いわゆる年序階梯制」

こうした結合が村々の事情によって「たがいに交錯して、生活協同機能を分けあいながら、画地的な枠内で、一つの体制として構造化」されて存在するのが村落社会であるとしている。そして竹内（1957,1959,1963,1967）は、それまでの系譜関係に基づく村落社会の研究偏重を指摘し、組結合、なかでも狭義の近隣集団の調査研究の必要性を主張した。

村落社会学による村落社会の研究をみると、その構成する家々の所属が明確で〝定型的〟な集団、とりわけ同族組織の研究が日本の村落あるいは社会の基層構造を解明するものとして調査研究が活発に行なわれてきた。

一方で村落の社会関係において、定型的集団である同族組織とは別の研究が、親族論的アプローチにたって同族組織の研究をすすめていた及川宏や喜多野清一によって指摘され研究が深められた。それは、親類関係の研究である。親類関係は、家々によって関係の範囲が違い、その所属も二者択一的でなく、関係締結の契機になった当事者の死亡等によってもその関係範囲が移動するために持続的で〝定型的〟な集団を形成しない。

だが近年では、家や同族団の弱体化・衰退化、あるいは親類関係の双系的親族関係化の進行により、村落内における「定型的集団をなさない」集団ないしは関係、あるいはインフォーマルな関係に調査研究の関心が寄せられつつある。

例えば、藤井勝（1991;387－410）の長野県佐久市の「ツキアイ」についての調査もその一つであろう。「ツキアイというのは、基本的には二つの家の間に設定されたものであるため、家の関係であるが家の集団としては展開しない。それは、一つの家について見れば、その家を中心にして作られたネットワークのようなものである」という。形成の契機はさまざまであって、「家の関係として世代から世代へと継承される」が持続性は相対的に短く、またその関係は、冠婚葬祭時に顕在化し、「実際のツキアイは相互的になされていると考えられるが、認知においてはかならずしも相互的でない場合がある」というものである。

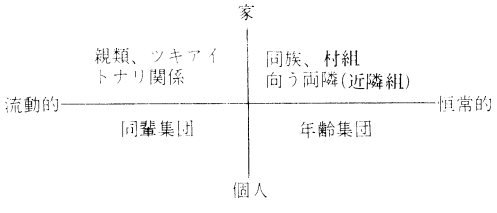
そして藤井は、村落構造が「同族型村落」から「講組型村落」へ変化することと結びつけて、「ツキアイ」を次のように位置づけている。すなわち「同族は単純に組にとって替られるのではなく、組とともに様々な非同族的な家の関係で発達してくるということである。親類や姻戚の関係などはこのような家の関係の代表的な形態であろうが、少なくとも今井村ではもっと多様な契機から成立する家の関係、すなわちツキアイの関係としてそれは展開したのである」と。

そこで、これまでの研究で取り扱われてきた社会関係と本稿で取り扱う「茶飲み友達」との相互の関係を位置付けておこう（図Ⅰ参照）。二つの指標で整理した。縦軸を「家－個人」とした。これ

6）「トナリ関係」は、「近隣組」と「同じく家並に即しながらも、家ごとに異なる交渉圏を連鎖的にもつ形が通例で、仲間帰属の関係は二者択一的な姿を示さず、村落全般の面からすれば、明確な集団形態をとらえがたい」（竹内 1967；154）としている。しかし竹内は、不明確ながらもこの「トナリ関係」も2つのタイプに再分している。1つは、「近隣組以外に、家ごとの比隣四周の至近居住関係に即した定型的な近隣交渉の関係」（竹内 1967；154）、もう1つは「その数も範囲も家々で異なり、もちろん定型を示さない。しかも、隣合っていても、トナリ交際をおこなわない家もある」（竹内 1959；133）というものである。要するに、〝定型的〟なものと〝非定型的〟なものがあるとしている。

は、それぞれの社会関係の構成単位が家か個人かに注目した分類である。横軸は「恒常的－流動的」とした。これは、その社会関係が構成メンバーの変化に関係なく存在するものかそれとも構成メンバーによって規定されている側面が強いのかどうかに注目した。従って、「恒常的」な集団ないしは関係の結合契機は主観的な感情から独立した契機、例えば制度的・慣習的契機で結ばれており、「流動的」な集団ないしは関係は主観的な感情や個別的・選択的な契機で結ばれている側面を持ち合せたものである。「家」あるいは「個人」という構成単位にかかわりなく「恒常的」なものが、いわゆる〝定型的〟で〝フォーマル〟な集団として存在しているであろう。そして同じく、構成単位にかかわりなく「流動的」なものは〝非定型的〟で〝インフォーマル〟な集団ないしは関係にあたるであろう。

図Ⅰ．村落内の集団ないしは関係の分類



Ⅱ．調査地概況

調査地であるＩ町は、鳥羽市街地から東南に約十数キロのところにあり、正面に伊勢湾、三方を背の低い山々に囲まれたところである。人口および戸数は、1991年３月現在で231戸・1009人である。近年の若者の流出等により、人口は減少傾向にある。

生業は、漁業を中心に自家消費分の農業を営んできたが、近年では鳥羽や伊勢方面への通勤者や旅館・遊漁業等が増えて、漁業従事世帯は減少傾向にある。しかも漁業従事者の高齢化がみられる。現在の漁業の種類は、海女漁業、一本釣、刺し網、大敷網等である。以前には、カツオ漁やボラ漁も盛んであったが、現在は海女漁業[7]が中心的漁業なっている。しかし、その海女漁業も資源の枯渇や後継者難で衰退の傾向にある。

次に社会組織だが、（狭義の）近隣集団としては、ほぼ地理的位置にしたがって町内を４つに分ける組（北・御堂・中・南）がある。この組は「ハエ（配）」または「タニ（谷）」とも呼ばれ、各々に配の元、配頭、浜役（あるいは口前）、組長＝漁業組合理事（役人と呼ばれたりもする）、配の老分、配の宿老といった役職の組織をもっている。ハエは55才までの戸主層の集まりであり、65才以上の男女は老人クラブに加入し、また、現在は若者の流出で消滅状態なのだが、15才から25才の者は青年団に加入していた。

また海女漁業には、カマド仲間と呼ばれるグループがあり、仲間のあいだでさまざな助け合いが行なわれている[8]。

次に家族・親族についてみると、ここでは三代程度で切れてしまう本分家関係がみられるが、同族組織とよべる程の組織化はされていない。ただ、ヤウチまたはオヤコと呼ばれる双方的親族組織がある。また村落内婚が盛んであったため「村じゅう親類」という表現をしばしば耳にする。しかし近年では、地区外からの婚入者が増えてきている。

家族は、直系家族形態が一般的であり、次三男以下は養子あるいは婿養子、まれに隠居（分家）

7）Ｉ町の海女漁業には、舟人海女と徒人海女がある。舟人海女は、夫婦でおこなう、すなわち妻が潜り夫が船を操りながら命綱を手繰るという漁業形態である。一方、徒人海女は、磯近くで一人で作業をする漁業形態である。

8）海女漁業に行く前に女たちが浜で火にあたるアタリ場（カマド）を一緒にする仲間のことである。10～20軒ぐらいを１組にいくつかに分れてある。どこの「カマド」に所属するかは代々その家によって決っている。娘たちは嫁ぐと夫の母が入っているカマドに加わることになる。カマドに加わった古い順に海側から座り、新入りの嫁たちは、「煙出し」と呼ばれる陸地側に座ることになる（夫たちは出漁までホーバイの家に居たり浜の木陰にいたりした）。
内部でさらに世代により仲間関係としての濃淡がある。嫁たちの収穫は夫の母のものと一緒に一軒の家の収穫として市場に出される。収穫が少ないと嫁としては気まずい。「ウチの嫁は…、あそこの嫁は…」と言われる。そこで同じ頃に加わった嫁同士は、一日の漁が終わったときお互の桶の中をそっと覗き合い、漁の少なかった人には１つ２つ仲間が獲物を与え合うこともあった。海からあがってからでは夫の母に見つかる場合は沖で与え合ったりした。「姉妹でもカマドが違ったりしてできないことたったので有難いことであった」ということが聞かれる。海女の上手な人は与えてばかりであったが、自分が病気をしたり何かで漁を休んだり、はやくに海

して地区内にとどまる以外には他地域に出ていた[9]。

Ⅲ.「茶飲み友達」

「一代のうちにトシ（年齢）を重ねると色々なホーバイができてくる」とI町では言われていた。これは、男たちのあいだで町内の役職をともに勤めたことを契機として役職毎にホーバイ付き合いが始まることを語っているのであろう[10]。しかしこれはまた、この町で生活する者がホーバイ関係を大切にし、各自が積極的にホーバイを作っていこうとする意志の結果ともとれよう。

調査をはじめて間もない頃に「ここはなかなかお茶はうるさいところでなぁ」と言ってお茶を勧められたことがあった。20年ぐらい前までは、男たちはそれぞれにグループを作り、ほとんど毎日のようにどこかの家に集まりお茶を飲みながら話をしていたと言う。「現在のI町では想像も付かないような社交性・付き合い」が行なわれ、「親でなくとも兄弟でなくともそんなグループには力があった」と言われる。

このグループを「茶飲み友達」と筆者は教えてもらった。しかし多くの場合、このグループを筆者に何と言って紹介すべきか彼らは困惑気味である。そのため筆者はしばしば「ホーバイの中のホーバイ」とか「兄弟なみの仲間」などと説明を受けることになる。これは筆者のような部外者への説明的命名であり、要するに定まった名前を持たない、すなわちインフォーマルな集まりであることの表現と理解できよう。

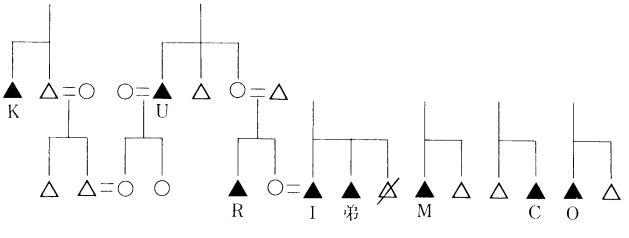
この「茶飲み友達」は「若い衆宿[11]」に通わなくなったときから、すなわち婚姻成立後に自発的に形成されてくるものだとも教えてもらった。また「茶飲み友達」は、名前から想像されるような隠居した老人たちがお茶を飲みながら世間話をして時を過すといった集まりではなかった。その具体的な構成と活動を、生活面と生産面から次にみていくことにしよう。

事例1　I（大正12年生れ）の「茶飲み友達」

大正12年生れのI（男性）の「茶飲み友達」の事例によりメンバーの形成および活動をみてみよう（図Ⅲ－1および表Ⅲ－1参照）。

形成の経過　Iは、尋常高等小学校を卒業すると同時に、反対する親を押切って大阪に飛び出して行った。3人兄弟の真ん中で家を継ぐ必要もないし、「こんな不便なところで生活もしたくない」と

図Ⅲ－1・Iの家に集まる「茶飲み友達」



注）▲印がIの家に集まっていた「茶飲み友達」。
　　⚔はIの戦死した兄。

女を引退したときには「今日はたくさん採れたから…」と言って収穫の一部を持ってきてくれたりした。
今では見られないのだが、次のようなカマド仲間全体での助け合いもあった。姑が海女に行っている家は別にして、若い嫁だけが海女に行っている場合には、親戚関係の有無に関係なく、カマドの年寄りが「今日の売りにいく物（アワビ・サザエなど）がないのは可愛そう」ということで、何人かが1つずつ獲物をくれた（カマトでこしらえてやるという）。さもないと「あのカマドは売るもんがない者がいるのに助ける者もいないんか」と非難された。

9）詳しくは、江守他（1967）、清水（1985）、足高（1991）を参照。

10）ホーバイとしての〝公の付き合い〟がなされるものは以下のものである。若い衆、配頭、浜役（口前）、役人（組合理事）、頭屋。

11）「遊び宿」ともいう。

表Ⅲ-1・Iの家に集まる「茶飲み友達」

記号	生　年	組	カマド	続柄その他
I	大正12	御	元	次男・継嗣
C	※ 大正14	中	隠　居	次男・分家
U	※ 大正 7	中	元	次男・分家
K	※ 昭和 2	中	?	次男・分家
弟	大正15	中	元	三男・ 婿
O	大正14	北	元	長男・継嗣
R	大正14	中	元	長男・継嗣
M	昭和 1	御	北	長男・継嗣

注）※印は、Iが誘って集めたメンバー。

思っていたからである。しかし昭和21年の夏、兄の戦死と都会の食糧難でIはI町に帰ってくる。その時、Iの家は弟の若い衆宿として使われていた。Iは、話が合いそうな者に声をかけて自分の家に遊びに来るように誘った。Iの同級生はほとんど戦死していた。集まってきたのがC・U・Kである。Iの家を若い衆宿として集まる弟の仲間とIが集めた仲間が1つになり、こうして現在のグループができた。もう少し詳しくその経緯をみてみよう。

男の場合、尋常高等小学校を卒業してから「若い衆宿」に通いはじめる[12]。Iの家は、Iの弟とMの2人だけの若い衆宿として始まった。その頃、1番上の兄は兵隊に行っていた[13]。2番目のIは前述のように他出していた。だからIの家は、Iの弟・母・祖母の三人だけだったので集まりやすかった。Iの弟とMは小学校の5年生ぐらいになった頃から（それまでも遊んでいたが）「本当に遊びだした」という。身長も同じくらいだったので学校でもいつも席が近くだった。Mは家庭の事情で3カ月遅れて尋常高等小学校に通い始めた。そのMをIの弟がいろいろとリードした。Mによれば、それから2人は特別の友達、すなわちホーバイの間柄になったということである。ホーバイの間柄ということになると親も2人の交際を支持してくれた。

2人は、1つ年上の娘たちの集まる宿に遊びに行った[14]。自分たちの同級生の娘たちもその宿には混ざっていたからである。同級生の娘が3人と1つ年上の娘が5〜6人集まっていた。その宿に1つ年上のOとRも仲間と遊びに来ていた[15]。2人はOとRと気が合い、この2人もIの家に自然と集まるようになった。こうしてIの家を若い衆宿とする4人の若い衆ホーバイのグループができた。

若い衆ホーバイの仕事は「仲間の結婚の〝橋渡し（したごしらえ）〟をすること」である。仲間が娘を好きになったとき、その娘の親の意向を確認したり説得したりする。大方の話がまとまるとその男の「親戚の重鎮」、例えば叔父さんが最終的な話にいく。Iの弟・M・O・Rはお互に“橋渡し”をしあった。

ふつう、婚姻が決ると「シュート屋通い[16]」がはじまり、若い衆宿に来なくなる。同じ宿の仲間が結婚して宿に来なくなる者が多くなってくると、残った者が別の宿に入り、その宿の集まりは自然消滅していく。しかし、Iの弟たちのメンバーはそのまま続いた[17]。

Iの弟の仲間が結婚していくのと平行して、C・U・Kの順にIに声をかけられて集まってきた。お互に話が合った。Iが誘って集めてきたメンバーは表Ⅲ−1の※印が付いた人たちである。Iを含めて全員が次男で、I町の外で生計を立てていて、終戦とともに食糧難などで戻ってきた人たちである。UはすでにI町内に分家しており、町外で暮す予定はなかったが、〝新しい考え〟の持主

12）この世代では、娘は尋常小学校を卒業したら徒人海女をやり始め、若い衆宿に通い始めた。男はさらに尋常高等小学校へ通うのがふつうであった。
13）その兄は自分の家ではなく友達の家を「若い衆宿」としていた。
14）若い衆宿は、それぞれ娘たちは娘たちだけで、男たちは男たちだけで自分たちの仲間、多くは同級生の5〜6人で1つの宿を作る。そして男たちが娘の宿に遊びにいき、いつも遊びにいくグループ同士が1つの若い衆ホーバイと考えられるようになる。
15）だいたい同じ宿に遊びに行くのだが違う宿にも時々遊びに行く。すると行く先々でかちあう者たちがでてくる。「狭い町内で縄張争いをしても仕方がないので仲よく遊んでいた」という。
16）夕食を済ませた後、妻の実家に寝にいくこと。
17）町内の他の人からは、若い衆宿のときからの仲間で集まりが続いていたので「仲がいいんやな」とか「珍しいグループやな」とか言われた。「若い衆の時の仲間は結婚までで、結婚して所帯をもつようになってくると付き合う仲間も変ってくる」と言う人もいる。

であった（後述）。都会で働いていた経験からか新しい考え方が話題にのぼることが多く、それでこの宿は「共産党本部」と言われたりすることも初めはあった。「青年団の集まりか」というぐらいに人が集まったこともあった。友達でなくても顔見知であればお茶を飲みに集まってきていた。

このグループができた当時は全員が海女専門（舟人海女）の漁師であった。しかし、まずMが海女漁業を5〜6年でやめて勤めにで、続いてK・I・Cと漁師を止めて勤めに出た。漁師をしている者と勤めに出ている者とは「常々の話は合わないのだけれども、お互いが言わんとしていることは肌で感じてわかった」という。互いの世界の情報交換をしていた。

日常の活動　「今日は海女行くかのう」と朝から海女漁業に行くまで集まって話をし、海女漁業に行って帰って来たらまた集まり、今日の漁についての話をし、夕食を食べに帰ってまた集まった。そして雨の日は朝からずっと集まってと、365日毎日、Iの家に集まっていた。Uの妻が当時のことを懐かしんで言うには「30歳代の時は夕飯食べたあと家に居たことが無かった。Iのとこへカッパ着てでも遊びに行った」ということである。集まってお茶をたてて、その日の漁のことやI町の生活などさまざまなことを話して過した[18]。夜中の10時、11時、ときには朝まで話し込んでいたこともある。囲炉裏を囲み薪を燃やし、その火で水を沸し込んでいたからお茶もまた格別に美味しい。「煎茶は飲んだことない。玉露しか飲まなかった」という。

大漁した者があると菓子やお茶、ときには酒も持って来た。お金が無くても仲間が持ちよってきて食べることができた。不漁続きの者があると「可愛そうだからチョッと祝い直ししたろうや」と酒や肴を買ってきて飲んだりした。

12月の中旬から翌年の2月の中旬頃まで海女漁業は休みになる。その間に仲間で漁具を作る。Iの家、あるいは日当りのよい畑の空いたところや浜などに集まって漁具を造った。例えば、コグチ藁・櫓杭とイレコ・錨綱・蓑等を作った[19]。

祝儀不祝儀時の活動　例えばI町の人たちによって「公式の祝い」と呼ばれるようなもの、すなわち昇り建て・名付け祝い・元渡し・船下ろし・建てまえ・厄年払いの祝い・葬式等がある。これらの祝いだと、父方と母方のイトコぐらいの親戚と自己のホーバイ（まだ若い場合だと若い衆・配頭・茶飲み友達ぐらい）の男衆が招かれる。父親が同居で健在の場合は父親のホーバイ（若い衆・配頭・浜役・役人・茶飲み友達）と父親の父方と母方のイトコぐらいまでの親戚も同じように招かれる。「オレらのはこれだけから親父らのは親父らでよんでや」と確認される。夫婦で来るのはよほどの濃い親戚だけである。妻の海女仲間には、その仲間で集まりやすい家に料理を持って行ってそこで食べてもらったり、時にはカマドに持って行って食べてもらうこともある。

祝儀不祝儀の場で親戚としての立場とホーバイとしての立場が重なった場合は、ホーバイとしての勤めをホーバイたちが外してくれる。「親戚としての勤めをしろ」ということである。親戚には形式的な筋道があるという。例えば相談をするにしても、「あれに相談してこれに相談せんというわけにはいかない」と言われる。祝いや香典の金額にも系譜の遠近によってランクがある（清水 1985）。ホーバイは、親戚の祝いの金額より上になることはできない。その代りに労力で援助を行った。

「ここの在所はなんでも友人を認めてくれる」といわれる。祝いの席に呼ばれてきて座敷に座るにあたっても、「ここの若い衆[20]おらへんやんか、ここの若い衆が座らんのにオラ座るわけいかんや

18）「今みたいにテレビもないし、娯楽がないので退屈でしょうがない。夜を過しようがない。それで寄って話した」というのがよく聞く説明である。

19）コグチ藁（櫓と船を繋いであるもの）は作るのにたいへん手間がかかった。藁を叩いて綿のように柔らかくする。コグチ藁は10日程で切れるので20〜30本用意した。よく叩いてあるのでいっぺんには切れない。段々に切れる。ナイロンのロープで作った方が強いのだけれども、椎の木でこしらえた櫓が痛む。何時も4〜5つ予備を船に積んでいた。流れたときに食べて助かった人がいたという。櫓杭とイレコはともにイマメ樫製で、I町の山から木を切出して作った。これも20〜30個用意した。

20）この「若い衆」というのは、その家の世帯主の叔父が言っているので、その世帯主の友人たちのことを指している。もっと具体的に言えば、これはMが語ったことなので、Iたちのグループのことを指している。

ないか」と親戚の年寄り、例えば叔父などが言う。席順は親戚の近い順に上座からすわる。親戚は招かれるだけで、準備はホーバイがしているから親戚も遠慮があった。

Mは言う。「6人の仲間は祝い事がある度に呼んだり呼ばれたりしている。孫の『初昇り』のときにはIが『床わき』(床の脇に座る人)になる。正面はその家の重鎮、例えば私の叔母の婿さん。大きな祝いだと一度に全員が席に付けないときは、自分の兄弟らは2次会みたいな恰好で祝う。小さいのだとこのウチから出て行った人と入ってきた人の叔父さん叔母さんとこの6人のホーバイで祝う。」

不祝儀には、親戚は何にもしなくて友人が全部してくれた。困ったときに助けるのがホーバイという考え方がある。「楽なのときはええやんか。親戚にさせといたら」という具合である。

近年では生活の向上と交通の便がよくなたことから、ホーバイで旅行にでかける人たちが多くなってきた[21]。Iたちのグループも一度だけ旅行に出かけた。しかし漁師を止めて会社勤めを始めた人がいたり、Iの弟が亡くなったので夫婦では行けない人ができたので出かけにくくなり一度だけしか行っていない。

茶飲み友達の妻たち　夫たちの〝茶飲み話〟にはIの妻は加わらなかった。別の部屋や納屋で籠を編んだり、筵を打ったり、天草採取で使う指サックを作ったり、針仕事をしたりしていた。女の人は朝が早いので早く寝た。

妻たちは朝の食事前に田や畑に行き、海女に行く日は午前9時には浜に行き火にあたった。10時頃に男たちが浜に出てきて午前中の海女漁業をする。午前中の漁が終わると男たちは浜やホーバイの家で弁当を食べた。そのあいだ妻たちは浜で火にあたっている。そして午後1時頃からもう一度海女漁業を行い2時頃に浜に戻ってきた。同じタチバ(船置き場)の者が全員戻ってくると男たちは全員で船を順番に陸に揚げ、それからホーバイの家に集まり茶をたてた。女たちは浜で火にあたりながら遅い昼食を食べ、浜の市場に漁獲物を出して夕食の準備にと家に帰った。

Iの「茶飲み友達」の衰退　Iたちのグループが集まらなくなった理由として、3つのことが言われている。

1つは、Iの長男(跡継ぎ)の結婚である。集まっている家の跡継ぎに嫁が来るとホーバイたちは「敷居が高くなる」という[22]。Iの息子夫婦は共稼ぎの会社勤めだったので昼間は気兼ね無く集まれたが、メンバーの多くが会社勤めだったのでやはり集まりにくくなった[23]。

2つめは、同じころ各家庭にテレビが入ってきた。「退屈で過しようのなかった時間」をテレビがうめてくれたという。

3つめは、I町の神事や行事を旧暦から新暦で行なうように改めたことがあげられる。それまでは何もかも旧暦でやっていた。だから、I町から他出した者が新暦の盆や正月に帰ってきても親や兄弟は仕事をしていた。「それではいかんではないか」と、Iが漁業組合の理事に選ばれたときにIが提案して、昭和42年から新暦に変更された。それで、盆や正月に他出した子供らが帰ってきても家族団欒できるようになった。しかし、「結果的にはよくなかった」とIは言う。「結局それで子供らがいるものだから外へは出ない。互に行くにしても相手の家にも孫らが来ていたりして賑わっているので行きにくい。昔は盆や正月には3日間遊び回っていたものだった。回らないといかんというような感じでさえあった。結局は家族本位になってしまった。友達という付き合いが段々に薄らいで、親戚同士も薄らいで…。都会式になってしまった」ということである。

21) 町内の役職を一緒に勤めた仲間やカマド仲間で夫婦揃っていく。
22) 嫁いで来た嫁が、集まっている仲間の娘やメイという関係だといくぶん集まりやすくなるが、それでも遠慮がでるという。まして最近の傾向として、他地域からの嫁が入るというのではたいへん敷居が高く感じられるという。I町の人は最近、他人の家に寄らなくなってきたのは、町外から嫁がはいっている家が増えたからという人もいる。
23) 普通、息子の配偶者が婚入してきてもその配偶者のいない時間帯、すなわち海女に行っているときを見計って集まり、徐々に疎遠になっていくようである。

事例2　T（明治32年生れ）の「茶飲み友達」

「茶飲み友達」は日常生活の互助や娯楽、それに祝儀不祝儀への参加といったものだけではなかった。これから紹介するような生業面での協力も行なわれていたのである。

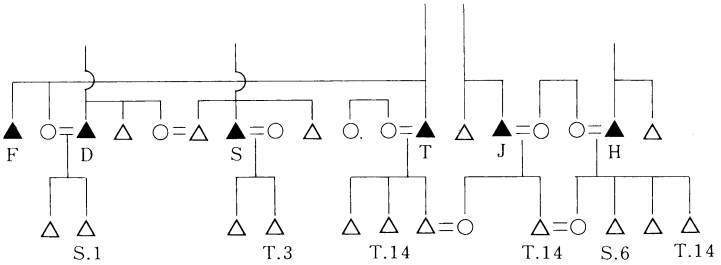
四艘張網をやっていたグループを紹介しよう。グループで網を買い、漁をはじめたグループであった[24]。

ヨソバリまたはバリ網と呼ばれるこの網は、秋の9・10・11月にかけて行われた漁である。海女漁業の方が稼ぎになったので海女漁業の合間の漁であった。獲物はアジ、ウルメ鰯であった。その日の潮時（潮のタタリともいう。潮の流れが止る時）により、海女漁業に行くまえに漁に出たり、また海女漁業から帰ってきてから漁に出たりした。かなりの体力を必要だったので男たちだけの漁業であった。

構成メンバー　この漁のメンバーはT（明治32年生れ）の家に集まるTの「茶飲み友達」（図Ⅲ－2および表Ⅲ－2参照）とその息子たちであった[25]。このメンバーがどのような関係で結びついたものかは、メンバーおよびその配偶者たちが既に亡くなっているのでわからない[26]。

四艘張網の導入・漁法・中止　この網は、Sの弟（Dの妹と結婚して志摩町御座で暮していた）の紹介で中古の網を御座で手に入れて持ち帰ったのがはじまりである。終戦から昭和35年頃までこの

図Ⅲ－2・Tの家に集まる「茶飲み友達」



注）①▲印がTの家に集まっていた「茶飲み友達」。
②「茶飲み友達」を形成するにあたっての関係で系譜関係の認識や理解に誤りをおこさない範囲で兄弟姉妹や婚姻関係の記述を省略した。
③M：明治、T：大正、S：昭和。生年を表わす。ヨソバリに主に参加した息子たち。
④Fは天草採りの出稼ぎでヨソバリには不参加。
⑤T・J・Hのそれぞれの妻はイトコの関係。

表Ⅲ－2・Tの家に集まる「茶飲み友達」

記号	生　年	組	カマド	続柄その他
T	明治32	御	北	長男・継嗣
D	明治36	御	北	長男・継嗣
F	明治40	北	?	次男・分家
S	明治38	南	南	長男・継嗣
J	明治29	御	北	三男・分家
H	明治31	中	中	長男・継嗣

24）「既婚者の仲間で共同の網を行なうのはたいへん難しい」とI町の人たちは言う。なぜならば、生業の中心は夫婦で行なう海女漁業だからである。海女漁業は、妻の海女としての能力によってはっきりと収入に差ができる。従って共同で網を行なった場合、網の収入に対する期待が仲間によってそれぞれに違うため、出漁についての意見等が合わないことが多いからである。

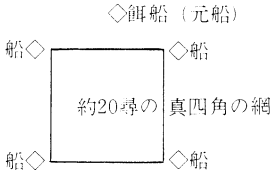
25）四艘張網がはじめられた時には、TとJとはホーバイであり、家の付き合いとしてはイマオヤコ（姻戚関係）の関係になっていた。Tの長男とJの娘が結婚していたからである。

26）このグループについての聞き取りは、主にTの次男（大正14年生れ）からのものである。

網は行われた。網の出資者は「茶飲み友達」のメンバーである。漁に参加したもので網代を除いて利益を均等分配した。

船は、各自が海女漁業で使っているものを使った。餌船あるいは元船と呼ばれるもの（決った名前はない）にTとDが乗った（図Ⅲ－3参照）。4隅の船には3人づつ乗込む。これらの船にはH・S・Jとその息子たちがそれぞれ乗込んだ。誰がどこに乗るという決りはない。息子らは臨時雇いのようなもので出稼ぎによく行っていて欠員がでた。Tは箱眼鏡で海中を覗きながら網の真ん中に餌を蒔いた。だから潮の流れが止る潮時より少し前後のほうが網の中にうまく餌が広がった。竿の先に袋を付け、袋を揺すると餌が落ちるようになっていた。餌は魚を粉にしたもので「かぶせ」、あるいは同じもの（アジ・ウルメ鰯）で同じものを捕るから「とも餌」と言った。魚が寄って来ると手を上げて揚げる合図をおくった。Dはトマイ（櫓漕ぎ）であり、これは一番体力がいる仕事であった。

図Ⅲ－3・四艘張網の船の配置



4隅の船は錨で固定し、水深5〜7尋の岩場の底にペッタリと網を鎮めて置いた。そして潮のかみ（上）、すなわち潮の流れに向って右手の船に獲物を揚げた[27]。1回の出漁で3〜4回の網の揚げ下ろしができた。網は自分らの好きなところに張る。小さな網目で網目の決りはこの網には無かった。

他に2軒ほどこの網をするグループがあった。

Tの死の前年の昭和35年にこの網を止めた。ちょうどその頃、ナイロンの網がI町内で使われはじめた時期であった。それまで使っていたのは綿糸だった（ふつう「紡績」と言っていた）。ナイロンの網は水きりがよくすくい網にはよかった[28]。しかし、魚も減り気味で以前ほどには水揚げも期待できなくなっていたので、網を買い代えても採算が合わないと思われ、それで網を買い代える時期この漁を止めることになった。次に別の網をしようという話も出ることなく、Tは亡くなった。また息子たちがこの網を引継ぐということも無かった。

Tの「茶飲み友達」の衰退　網はTの亡くなる前年まで続いていたが、グループの集まり自体はTの家の跡取りである三男が結婚するとともに衰えてくる。理由は事例1の場合と同じである。ただ、この三男夫婦は漁業をしており、結婚後の数年間は伊豆半島や熊野方面へ天草採りの出稼ぎに行っていたので、多少事情は違った。

事例　3　X（大正2年生れ）の「茶飲み友達」

Xのライフ・ヒストリーのなかに現われるさまざまなホーバイ関係の中で「茶飲み友達」をみてみよう。

小学校卒業　小学校を卒業後「若い衆宿」に通い始める。男は男で5人ぐらいで集まって、「今日はあそこに遊びに行こうか」と同年齢の娘が集まっているところに遊びに行った。そこの親父が冗談の一つも言う所へは行きやすかった。

同時に、親のすすめでXのイトコであるGの家にも通い始めた。年齢はとても離れていたのだがGの「茶飲み友達」の仲間に加えてもらった（Xが13才のときであった）。

Gの家に集まる「茶飲み友達」のを系譜上の位置および彼らの属性は図Ⅲ－4・表Ⅲ－3に記し

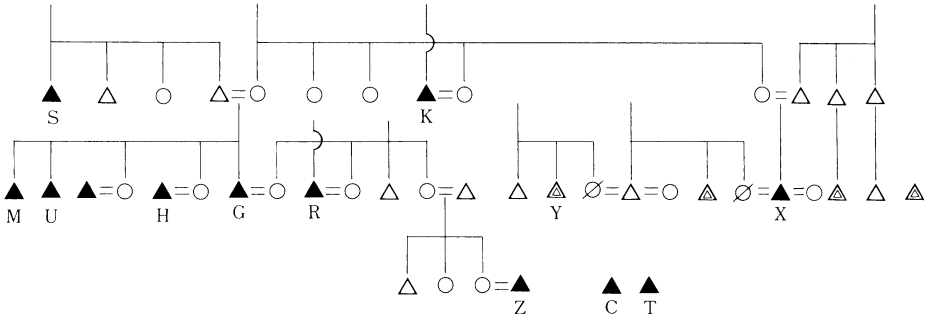
27）これは取り舵（左舷）から獲物を揚げないといけないという漁師の信仰からである。取り舵の「取り」と取り込むの「取り」の語呂合せの縁起担ぎである。また、水死体の土左衛門は面舵から引き揚げるということも原因にあった。左の船は面舵（右舷）から獲物を取込むことになる。
他方、取り舵から取り込むのが取り込み安いという。一本釣の人でも取り舵側に向いて釣をしている（遊漁船はそんなこと関係なくやっている）。海女でも、取り舵からアワビを入れる。櫓が取り舵に付いており、男の人も取り舵から覗いて待っている。だから、あとから来た船が船を寄せる時は絶対に取り舵側には付けてはいけない。仕事のじゃまになるし危険でもあるから。

28）ナイロンは擦れに弱いが水きりがよく軽い。

た[29]。「晩になると、イロリを囲むように（父の）友達とか親戚の人が集まって、お茶を飲んでいた。菓子なんか買ってきたのを私ら（Gの長女と妹）に与えて、『これあげるから勉強しにどこか行き』と言われて、イロリ端からよく追い払われたものだった」という（Gの長女の談）。また、C・Z・T・Uといった博打の好きな人たちは宵のうち（夕方早く）から座りに来ていた記憶があるという。

Gは兄弟が多く、みんな寄ってきていた。Xは、年齢は若かったけど〝兄弟みたい〟に寄って話を聞いていた。Gは賢い人だったからさまざまな知識を得ることができた。何時も全員が揃うとは限らない。また、「若い衆宿」だと夜中まで集まっていたが、ここでは2時間ほどしかいなかった。Gが亡くなるまで毎日行っていた[30]。

図Ⅲ－4・Gの家に集まる「茶飲み友達」



注）①▲印は、Gの家に集まっていた「茶飲み友達」。
②◬は、Xが現在、相互によく訪問する者たち。

表Ⅲ－3・Gの家に集まる「茶飲み友達」

記号	生　年	組	続柄その他
G	明治19	北	長男・継嗣
K	？ 明治20	北	長男・継嗣
S	？ 明治20	北	長男・継嗣
R	＊ 明治24	御	長男・継嗣
H	＊ 明治26	南	次男・分家
M	＊ 明治36	北	三男・分家
Q	明治34	南	長男・継嗣
X	大正 2	御	長男・継嗣
C	明治38	南	長男・継嗣
Z	明治37	南	長男・継嗣
T	明治45	南	長男・継嗣
U	明治36	南	次男・ 婿

注）①？印は、生年が不明。親戚、兄弟や子供の年齢から推算。
②＊印は、『前祷人名簿』の記載による。従って、±1～3才誤差がある。
③カマドの項目は、未調査が多いので省略した。

29）図Ⅲ－4・表Ⅲ－3はGの長女からの聞き取りによりまとめた。しかしXによれば、よく集まっていたのは、U・M・Qの3人だけであるという。Hは、Gの妹と結婚していたがその人が亡くなり後妻を貰っていたので不祝儀のときだけきていたという。また、Kも来なかった。Kは酒も飲まないし。Gの家の上隣だったので、たまにその家にGが行っていたぐらいだという。

30）Gが亡くなったのは90才。Xが63才のときである。

Xは、Gの母には覚えがあるけど、Gの父のことは子供の頃にチョッと覚えがあるだけである。

Xは19才で結婚し、結婚すると妻の家に寝に行った(「シュート屋通い」)。大晦日に妻を連れてきたけど、その後もまた嫁のウチへ寝に行った。

ホーバイは、付き合いが始まった「初めの10年や15年は『ホーバイ、ホーバイ』と付き合うが、もとが他人やもの最後には行かんようになっていく。やっぱり血の通ったものは最後まで付き合う」とXはいう。

配に加入後　結婚後に初めについた役職でホーバイ関係が生れるのが「配頭」である。配頭ホーバイ(表Ⅲ－4参照)は4人のうちで一番年長者が元(集まる所)をする。しかし、最年少のXが元をした。一番年長者のJの家が小さかったからである。NもJも一緒に役職についていた時にはXの家に来たがそれ以後は来ない。Jは博打で負けて金を借りに来たことがあったが、「生活費に困ってならなんするけど(貸せるが)、博打に負けて『金を貸せ』とはわしはそんな金はよう貸さん」とつっぱねたことがある。Xは今78才だけど、Yだけは今も「ホーバイ、ホーバイ」と言ってお互に往来している(NとJは既に故人だが)。最近では配頭ホーバイで毎月掛金をしておいて旅行に行く者がいるが、Xの世代ではないという。

表Ⅲ－4・Xの配頭ホーバイ

記号	生　年	組	続柄その他
N	大正 1	北	次男・分家
X	大正 2	御	長男・継嗣
Y	明治45	中	長男・継嗣
J	明治39	南	次男・分家

次に勤めたのが「口前」である。口前ホーバイ(表Ⅲ－5参照)としての相互の往来は滅多にない。年齢が全然違うのでどうしても話が合わない。

今では図Ⅲ－4の△印のついた人たち、すなわち「配頭ホーバイ」のY・前妻の弟・イトコ・友人と比較的よく付き合いをしている(相互に家を訪ね合う)[31]。

自分が行った場合によく思わない家もある。自分が行くと、「トト(戸主)がカカ(戸主の妻)に『菓子買うて来い』、カカは子供に『買うて来い』、子はまたカカに『買うて来い』と言う。そんなうちに2度とは行けない。Xは何時でも誰が来ても、「どうぞ」と出せるように酒でもビールでも菓子でも用意してある。

表Ⅲ－5・Xの口前ホーバイ

記号	生　年	組	続柄その他
A	？昭和 4	北	長男・継嗣
X	大正 2	御	長男・継嗣
B	？大正12	中	長男・継嗣
D	明治45	南	三男・分家

注)？印は、年齢について未調査で、Xによる推定である。

ホーバイの付き合いの衰退　一緒に役職をつとめたホーバイがみんな生きていると「ヤーイ、ホーバイ、行こうか」という感じでお互の家に遊びに行けるけが、仲間がだんだんと死んでいくと、〝敷居が高く〟なっていく。

集まっていても、世代も代ってくると遠慮する気になってくる。そこの家の息子に嫁が来ると行きにくくなる。嫁がいると色々と話にくい。その嫁が喜んでサービスするようなら行けるが、年寄りが行くと嫌がらないかという気があるのであまり行かなくなる。息子のホーバイたちも親父がいると親父が煙たくて寄ってこない。「親父の居るとこで兄弟同士語り合うのもあんまり芳しくはない」とXはいう。

Ⅳ　事例の整理：「茶飲み友達」の基本的性格

1)「茶飲み友達」の形成から衰退

「茶飲み友達」と教えてもらったグループが成立するのは結婚後であり、集まる場所の決定は「若い衆宿」が選ばれるのと同じ基準である。すなわち、部屋に余裕があったり、自分たちの上位世代、特に父親が歓迎して受入れてくれる家、あるいは父親が居ない家が選ばれる。

例えば事例1のIと事例2のT、共に幼いとき

31) この友人については未調査。またXは、組合理事・頭屋を勤めていないので役人ホーバイや頭屋ホーバイはいない。

に父親を亡くしており、「茶飲み友達」の形成時の家には母親しかいなかった。自分の父親がいないということは、自分たちのグループを気兼ねなく集めることができる最上の状態であろう。男性は自分が所帯をもつ頃にはどこかの「茶飲み友達」に属している。

そしてこの「茶飲み友達」の集まりは、跡継ぎの配偶者がその家に婚入することによって衰退が始まる。「集まっている家に跡継ぎの配偶者が入ってくるとその配偶者に対して遠慮が出てきて、敷居が高く感じられてくる」ということになる。これはIの家に集まっていたUの発言である。

つまり、上位世代の既婚男性の茶飲み友達と下位世代の既婚男性の「茶飲み友達」が避け合っている関係になる。見方を変えて述べれば、各人が世帯を運営している限りはこの「茶飲み友達」の結合が強いと言えるであろう。

2）結合の契機

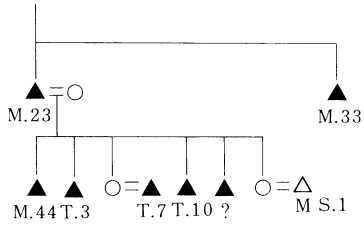
事例1のIを含め、Iが集めたメンバーはすべて次男で、Uを除いて町外で生計を立てていた人たちであった。ここで重要なことは、Iが「都会の空気をすってきた」という共通の体験の持主を積極的に集めている点である。要するに、〝話が合う〟あるいは〝気が合う〟ことが大切なのである。

前記したようにUは町外で暮す予定ではなく、町内に分家していた。従って、Iが集めた他のメンバーとは異質な存在であった。しかし、UをIが誘ったときの話は、このグループの結合契機を理解する助けになる。

Uがシベリア抑留を経てI町に帰ってきたのは昭和24年31歳のときであった。すぐにUの若い衆ホーバイの紹介でUは結婚する[32]。UをIが誘ったのは同じ頃であった。「Uさんはわたしらから見たら、れっきとした〝共産党〟でした。現在ではあの人ほど働く人はない。まだ磯バタにも行くし遊んどることはない。わたしらみたいにのんびりしてない。その人間がわたしらと知り合った当時は、『人間は8時間以上労働したらバカや』とか、『働く者は奴隷や』とか、『8時間働いたら公園行って家族団欒で遊んだりして娯楽をしないといけない』と〝立派な話〟を浜でしていた。シベリアで徹底的に教育を受けてきていた。わたしも兵隊から帰ってきた時はそう思った。ここの在所の人は昼も夜もよく働く。それを嫌って自分もI町を出ていったので。たが、『Uさん、あんたそう言うけど、それは絶対に将来、言う事と行動が伴わなくなるぞ。やっぱり〝郷に入ったら郷に従え〟という。そんなことしていたら、この在所では生活も食べてもいかれやん。そんなつまらんこと言うとらんと、とにかくわしんとこへ茶飲みに来い。ええグループやし毎日話しとるから世の中もわかるから』」とこれが始まりだった[33]。

またさらに、事例1のMがシュート屋通いをしていたときのことも、「茶飲み友達」の結合の契機を理解するてがかりになる。そのシュート屋も別の「茶飲み友達」のグループの集まるところであった（図Ⅳ－1参照）。集まるメンバーはMの義理の兄弟たちであった。しかし、Mよりずっと年齢の上の人たちだったので、話の輪に加わったり、傍らで話を聞いていたりしたりすることはあ

図Ⅳ－1・Mのシュート屋に集まるグループ



注）M：明治、T：大正、S：昭和。生年を表わす。

32）戻ってきてすぐに、まだ独身だったUにY・S・Mの3人が結婚相手を探してきてくれた。「あの家にちょうどいい娘がおるやんか」と。紹介された娘はSのイトコであった。Sとは彼のイトコと結婚した関係で親類としての付き合いも重なって結びつきは一層強まった。Sは早生れで学年が1つ上で若い衆宿も一緒ではなかったのだが小学校時代からの遊び友達であった。一方、Mのことはあまり知らなかったが、戦争中にUの母親の世話になったと言って協力してくれた。Yとは年齢が2つ違うが若い衆宿の仲間が結婚しはじめてその宿の集まりが悪くなってきたとき、一緒に色々な宿に回ったときの仲間。Uにとって若い衆ホーバイと呼べる存在はこの3人である。若い衆宿に一緒に行っていた同級生の仲間はほとんど戦死していた。

33）この時までIとUの関係は、年齢の開きがあったので知らない人に等しかった。カマドが一諸であり、また親戚（Uが戻ってくる少し前にIはUの姉の子と結婚していた）ということで冠婚葬祭で顔を知っているぐらいだった。

ったが、そのメンバーにはならなかった（あるいは、なれなかった）。やはり、話が合わないのであった。

3）役割

日常生活における情緒的安定や互助協力、また生業面での共同がみられた。

また祝儀不祝儀においては、親戚とは違った協力のあり方がみられた。親戚の金銭的協力にはランクがある。系譜の遠近という客観的な指標で協力の度合いを決めることができる。しかしホーバイは日頃の付き合いで決って来る関係なので、明確にその協力の度合いを決める指標がない。従って、その主観的な判断に頼って、労力での協力という客観的には測り難い形が採られる。「茶飲み友達」は〝兄弟なみ〟あるいは場合によってはそれ以上の労力の提供がなされるが、祝い金や香典ではイトコより少ない金額と決っている。

4）メンバー相互の関係

構成メンバーの相互の関係の種類をあげてみると、

事例1：兄－弟、妻の弟－姉の夫、妻の母方叔父－めいの夫（姉の娘の夫）、友人同士

事例2：兄－弟、妹の夫－妻の兄、妹の夫の姉妹の夫の兄－弟の妻の兄弟の妻の兄弟、友人同士（あるいは妻がイトコ同士、妻同士が姉妹）

事例3：兄－弟、妹の夫－妻の兄、父方の叔父－甥、母方の叔父－甥、母方のイトコ同士、妻の姉の夫－妻の妹の夫、妻方の姪の夫－妻の母の妹の夫、友人同士

以上のように構成されている。構成面からこれらのグループについて言及すれば、「親族関係に友人が混じったもの」とも「友人の集まりに親族関係者が混じったもの」とも言える。事例1で紹介したMのシュート屋に集まっていたグループでは完全な「親族集団」ということになる。

さらに、メンバーの誰に聞くかによってもこのグループの紹介のされ方は変ってくる。例えば事例1では、Iから見れば「親族関係に友人が混じったもの」と紹介され「兄弟なみの付き合い」ということになる。同じグループでも、M・C・O・Kからみれば「すべて他人の集まり」となり、「ホーバイの中のホーバイ」関係と言われる。さらに、それぞれの兄弟は別のグループに属しているので、「兄弟以上の付き合い」という紹介を受けることになる。要するに、その場合場合によって「親族集団」とも、また「友人集団」とも理解できるのである。

ところが民俗学でいう「同輩集団」の概念ではこのような理解はない。竹田（1989）によれば「同輩集団」とは、「人数・役員・規約等の制度的なものを欠き、全くインフォーマルで任意な存在で、いわば同士的結合」であり、「二～三歳の年齢差を問わずに性格の一致した者同士の作る」「友人集団」である。そして、「長患いしたとか事業に失敗したとかすれば助け合うことはもちろん、祝言や厄除けなどにも互助協力の機能を発揮」し、「一旦形成されれば原則としてそのまま一生の付き合いに持ち越される」ものであると規定している。「茶飲み友達」はこの「同輩集団」の概念規定によく一致している。しかし、いま見てきたように「友人集団」としてしまうには躊躇せざる得ない。

そこで次のような指摘を採り入れることが適切ではないかと筆者は考えている。『トカラ列島社会の研究』において鳥越皓之（1982:47－48）は、例えば労働組織や祝いといった親族組織が具体的に機能するような場に「ほとんど例外なく、非常に簡単に友人が介在してくる事実」を指摘し、双方的親族と友人の結合を指して「朋類関係」という概念を提示している。結合を支える意識は「親しさ、頼みやすさ」である[34]。

そもそも村落内婚率が高いような村落では、親族と友人との境は曖昧なものであり、「親族であるかないかは決定的な資格要因になら」ない。そして、親族関係者が集団を形成するのは、「兄や姉の夫などであるから、親しさや頼みやすさが強い点において、朋類関係（親しくつきあえる関係）が強いということにすぎない」ことによると指摘している。

竹田の調査において、「同輩集団」の具体的なメ

34）同様のことは、奄美社会の研究においても戸谷修（1981）が「パラジの関係」ということで指摘している。

ンバーについての記述がなされていないので、はっきりしたことは言えないが、恐らく次のようなことを言ってもよいのではないかと考える。

西南日本の村落にみられる「同輩集団」についても、鳥越が述べたことと同様のことが逆の方向から言い直せるのではないか。すなわち、双方的親族組織に注目するあまり「同輩集団」が「友人集団」として浮かび上がり、現実の集団に親族関係者が入っていることを軽視して、「友人集団」と安易に理解されてしまっていたのではないだろうか。当事者たちの意識に注目して、「気の合う仲間」あるいは「親しく付き合える者の結合」と理解するのが自然な理解ではないだろうか。

このような考え方を支える話題としてI町では次のようなことが聞かれる。

③イトシドシ

ちょっとした酒の席であり祝いの席であることを「ハダテル」と言う。「ちょっとハダテルから寄ってなぁ」といった具合に使われる。この「ハダテル」ときに呼ばれる人たちは、自己（既婚男性）の兄弟姉妹とその配偶者、それに濃い（あるいは固い）ホーバイである。これらの人たちをまとめて「イトシドシ」と以前には呼ばれていたという人がいる。

この言葉は現在では使われていないので、次のような付き合いの内容を示すかたちの表現が使われる。「イトコだとこのぐらいでいいけど、わしは箸が動いたら（「ハダテル」席に）呼ばれとんのにそんな分けにはいかんわ」というように、〝箸が動いたら呼ばれる関係〟と説明される。日頃の付き合いで自然と決ってくるもので、親しい間柄・愛しい人・近いとこと説明してくれる。濃い親戚（兄弟）なみの付き合いをしていることになる。この人たちは、その家に対して発言力の強い人であるという。

これは、既婚男性を中心として世代ごとに形成されている。何か祝い事があるときに「これはお父さんのやで、お前らはお前らで呼びや」と両親と同居の場合には、それぞれの世代ごとのイトシドシが招かれた。上の世代は上の世代のイトシドシがあり、下の世代には下の世代のイトシドシができる。自分の一代のうちで、年を重ねるごとに色々なホーバイを作り、一代限りで切れていく。跡継ぎの配偶者が婚入してくることによって、その家に対して発言力のあるイトシドシは交替してくるのである。

④まとめ

次の2つのことが指摘できるであろう。

一つめは、「同輩集団」という概念の修正である。「友人集団」という理解での西南日本の村落生活における「同輩集団」の意義の指摘は、結局は親族組織研究への偏りの結果ではなかったのか。西南日本の村落社会、少なくとも志摩漁村のI町では、生活の互助共同を考える場合に〝気が合う〟関係で集まったグループという認識が大切ではないかと考えられる。

したがって、「朋類関係（親しくつきあえる関係）」（鳥越1982）による結合と理解するのがI町の人々の意識を反映した捉え方であると思われる。「同輩集団」を「友人集団」と捉えることを再考すべきであろう。

二つめとして、西南日本の村落でみられる婚姻形態が当事者たちの自由恋愛に委ねられるのも共通の基盤によるものと考えられる。また、その自由恋愛を成立させる同じ「若い衆宿」に集まる若い衆ホーバイたちの結合の契機とも考えあわせると、次のようなことが言えるのではないか。すなわち、西南日本の村落生活においては、15才で一人前と認められた男子の各人それぞれを中心に、自己と心理的同一性・共感性のようなものに基づいた（従って、当人一代限りの）小集団を形成し、そしてまた修正・再編しながら、それによって日常生活の互助協力をしていくように制度化された社会だと考えられる。

V　おわりに：茶飲み友達とI町のこれから

事例1で紹介した茶飲み友達の息子たちの世代では、同級生だけの集まりがある。その集まりは、年に1～2度は伊勢の方で飲み会をしているぐらいである。

Iと同居している長男（昭和25年生れ）は現在会社勤めである。I町において、高校進学・都会

への就職が盛んになったその最初の世代である。高校へ巡航船で通い、若い衆宿にも通っていた。若い衆ホーバイの付き合いは現在でも時にはあるが、Iのグループのような集まりはない。職業が違うと集まりにくい。会社勤めだと帰って来る時間はまちまちだし、帰って来るのも遅いからである。皆がそろわない。何かのときにはよく相談し合っているが、兄弟なみの付き合いまでにはならない。

「現代は家族第一の時代になってしまった」、「日曜になると家族を連れてどこかに遊びに行くということが第一になっている」という話はI町の年寄りからよく聞くことである。これは共同体規制からの解放を言っているのではない。ムラと個人の間にあったホーバイたちの関係の衰退を嘆いているのである。そしてこの嘆きは懐古的なものではない。ホーバイたちの集まりの中で漁業の将来やムラの政治についてや伝統の継承が行なわれた。それが無くなってしまったことに危機感を感じているのである。Iのホーバイたちが盛んに集まっていたときは、「家族や子供を犠牲にするのが普通であった」とまでIはいう。

男たちにとって自己のつぎにはホーバイたちという仲間の集まりが基礎的な生活集団としてあったことを語っているのである。

【引用文献】

足高壱夫
1991 「村落共同体におけるリーダーの選出過程」『関西学院大学社会学部紀要　第64号』
江守五夫 他
1967 「志摩海女漁村の社会構造と慣習法」 明治大学『法学会誌　18号』
清水由文
1985 「漁村の親族組織の一考察」余田通博博士追悼論文集編集委員会『村落社会——構造と変動——』関学生協出版会
竹内利美
1957 「組と講」西岡虎之助・大場磐雄・大藤時彦・木内信蔵監修『郷土研究講座　第2巻　村落』角川書店
1959 「近隣関係と家——東北村落の一事例を通じて——」喜多野清一・岡田謙編著『家——その構造分析』創文社
1963 「新集団の生成と展開——概括的展望」『東北農村の社会変動』東京大学出版会
1967 「近隣組織の諸型」『東北大学教育学部研究年報 15』
竹田旦
1989 『兄弟分の民俗』人文書院
戸谷修
1981 「奄美農村にみられる社会的性格の諸相——本土農村との比較を中心として——」松原治郎・戸谷修・蓮見音彦編著『奄美農村の構造と変動』御茶の水書房
鳥越皓之
1982 『トカラ列島社会の研究』御茶の水書房
藤井勝
1991 「佐久市今井の家・同族・村落」長谷川善計・竹内隆夫・藤井勝・野崎敏郎『日本社会の基礎構造——家・同族・村落の研究——』法律文化社